



特 文庫10  
7376

文名 卷五 年



今之為中御言殿 下余の於内侍也 亦接  
一柄中御之度に 極其の由方を 兩本の青蓮殿の  
始として 此柄家孫奉祝 傳奉祝を 外由役命  
己家子孫列御言の 兩本御言 務及 白  
尊之權更成 亦之御言 亦之御言 亦之御言  
亦南命之度に 亦之御言 亦之御言 亦之御言  
亦僅け 亦之御言 亦之御言 亦之御言 亦之御言  
中言亦御言 亦之御言 亦之御言 亦之御言 亦之御言  
接更 亦之御言 亦之御言 亦之御言 亦之御言

西垣文庫







世皇の御座の傍に御座り

松平春高が御座り此の時松平春高が御座り此の時松平春高が御座り

相成り且つ此の時松平春高が御座り此の時松平春高が御座り

之の時松平春高が御座り此の時松平春高が御座り

此の時松平春高が御座り此の時松平春高が御座り

之の時松平春高が御座り此の時松平春高が御座り

急成り此の時松平春高が御座り此の時松平春高が御座り

急成り此の時松平春高が御座り此の時松平春高が御座り

急成り此の時松平春高が御座り此の時松平春高が御座り

右の時松平春高が御座り此の時松平春高が御座り

此の時松平春高が御座り

薩州一科

英國子八百六十二年八月十日中我七月十日松平

新洲英軍艦二口モラント書状云々為漆に只今迄

中右艘麻度迄廿六日中軍艦多頭の新洲を

打ちぬれり去々七時我七月十日午時軍艦麻

度船隊に砲彈五発大砲四発日本へ打出せり

トて此の人々殺せりカヒタニ 船將ヨリシゲ人

コシエントル大將ウエルモット人名右一人一浮丸に打

殺せり多し死人数千人死に多し指搦船軍艦

為漆入海に來りて死に多し書状に云々

文巨細に記し

得て唯この大船に載る也

高千穂の舟士村者場より出たる水師提督連  
合隊の舟あり 之を定めて七月十日外に出る  
と云ふ書あり 六月廿六日横濱出帆し 英吉利西  
航の薩州表へて横濱を接し 戦年との七月廿  
七日横濱の初七艘の内七艘を定めて六艘のウツ  
ル船指し 有る船死 甲比丹コシシテイル始怪我人  
死人数十余人有る中  
薩州の船を定めて船隊隊形四艘のウツル怪我人

船を定めて薩州市中或は新橋のウツル

一六月中英船出帆し 薩州の船を定めて船  
隊隊形四艘の内七艘を定めて六艘のウツ  
ル船指し 有る船死 甲比丹コシシテイル始怪我人  
死人数十余人有る中

船を定めて薩州市中

新橋のウツル

船を定めて薩州市中

一 日本船を定めて二艘の船に 是を定めて船  
隊隊形四艘の内七艘を定めて六艘のウツ  
ル船指し 有る船死 甲比丹コシシテイル始怪我人  
死人数十余人有る中

右に松原のそと長崎の買入の船一舟場を掛  
たれと軍艦程を上り長崎の昔の玉の百やん  
ドヤルトハ二人乗列して一列に乘れり長崎より  
射たれ甚く法り死にスサレシテ一人余二 九破  
烈丸又ハ二十斤の玉廿四斤の玉 実丸二カビ  
タニ并コシントルハ午はオ府中下子と以甲板  
の橋上舟の二カ雨二一浮丸し為船死ス者十人  
ニテハ破烈丸甲板の中央に破烈丸一水ま七人船死  
ス者ハ水ま五人口イラナント宿名子ヨス五人右五人

張と白右の二カ雨の號車之玉氣悪 雨降り  
風降り吹く午はオ府中府中夜オ府  
午ト、夜地止オ七付十五下、小軍艦をワアツリ  
オ隻の琉球船ヲ焚ケリオ九付二十ト、道徳場  
及び高家焚ハ 府道徳場オオオ九、終夜オ  
八月十旬日中我七月午はオ府 二十ト  
破り上テ蒸氣ヲ出シテ 府道徳場向イオ  
海ハ破船又ハ実丸只オオモハ武多新老破漏  
セ下ハ其場よりけオ目のかりたる雨二



長人日録 弘号ユライリス死人拾人少  
女人の死人死日へ下ん 死人七人の死人土官同  
凡ゴス少者死人の死人死同コケツト死人を人  
少者六人の死人死日セリ子ナド死人のユリス  
ホリス少者少人同ハワツク死人の少者

まゝ宮増子代田稲原大明神

灌

愛小長深年中古田道之の丸まつこ  
依り子代田村の磐北青山の宮増所原宮増邑  
川城その死の丸市城出末ス大凡於公克優  
お物を少者少城の上ニ来りて神在依り  
宮増年一活城と名附てな京於市上路有て  
子代田村稲原の依りからかむ少河別業を  
正候一御所墨附を給ら又そなは市り神をみ  
まかりにまをトなれりお名を是を古切は神宮  
天上の月と是を細ノ洞細を居り守りて死之

から時節の西南の風もあつて七番もり  
の教志人とあつて目もあてられぬかたに  
しるふのふりもあつて伊城のまを附  
有る宮場におつて今なら文名をなす年三月  
伊上段有るは信仕立あつて心もあつてあ  
るく首段して伊上段還伊上段あり  
法人は宮場へ集積す伊上段ありあつて  
あつたかたのあつていしあつてすえ保九年の  
あつて伊上段有る格好はあつてあつて花見時

大徳の教國運の盛るるあつて法新成就  
しつてうたふたつてあつてあつてあつて  
利益有るあつてあつてあつてあつてあつて

歌よ

答人り是宮場の水神  
清くしてあつてあつてあつてあつて

あ代り松の葉や  
稲の出来

修治備之條中現言

付若婦士此下日勝云哉一市一和と云と一

實不天下の争亂を如く免罪と云は神祇

を以て代天賦命殺敵もの云

右の如く徳之條に如く一法門に張るべき所

知川并七州人如く云云之條に如く如く

相國の如く大國の如く云云の如く

三  
子り亦可

文久二年六月

為美乎於之條 河原本條 首と櫛門

後者より 徳家へ 直ぐと云

和年紀傳の如く

和年紀傳の如く

大正元年

師長官

友室依傳の如く

吉柳佐助

建永元年

駿河

長保元年

西尾隆之助の如く

少室山在嵩山北

京兆郡在唐京兆府

仙舟是山之篇

七仙曲法

神皇正統

良人

二偏田院

上德寺堂

洞玄文

堂和世序

古方舞衣

天下泰平日矣皇朝大業

山志評定

道之師校婦貴之師心方莊南之務  
古方政言諸事新日世下後氣無敏高  
仕人但仕合古方此來之般祖師之務  
德良人江山使世上長之穩亦成之  
法園正高者有也持古者新未持古入新法  
之古泰平而代師為事也德良人古權  
性之師也心之古者古者古者古者  
古者古者古者古者古者古者古者

此の徒を以て還所となすは  
ありて永く 所従て去りて  
七と希と云ふ上

- 国語を念ひて ころも花
- 山國のくね夜中 睡かひつる花
- 煙草盤に改るころも花
- 七とぶる神地をなすころも花
- 春の歌をさし 離れ花
- 春の歌を成すころも花
- 常水府軍するころも花
- 山國の備石位をなすころも花
- 國語を念ひて 離れ花
- 夜色高人所だりし花
- 色を待利し 離れ花
- 毒を養ふころも花
- 湘陰の事 離れ花
- 七と希と云ふ上

- 原曲のころも花
- 花を念ひて 離れ花
- 英王下ちみ 離れ花
- 常世の歌をなすころも花
- 根来甲斐のころも花
- 根来甲斐のころも花
- 山國のくね夜中 睡かひつる花
- 春の歌をさし 離れ花
- 春の歌を成すころも花
- 常水府軍するころも花
- 山國の備石位をなすころも花
- 國語を念ひて 離れ花
- 夜色高人所だりし花
- 色を待利し 離れ花
- 毒を養ふころも花
- 湘陰の事 離れ花
- 七と希と云ふ上

又月  
花を念ひて 離れ花

何んを待

文久二年四月十日浪士何し彼より中との  
あるふいそ自任し和主被及田舎をたし母  
控れ彼有る

けのぬれ難き有る  
谷やう修り市中と  
さこりー一服食全飲  
を合有り人心を動机  
力はは服石を前  
二舟定本を以ての  
五月

浪士  
神平合舟  
長田國彦

権現様以来之百余年を教而思はれん得る事  
上と奉討敵討仕はれん乞取に任所  
上意く有るはれん一六速に此を捕る事  
浪士  
我々哉

下海了事の上と奉討敵討仕はれん乞取に任所  
浪士  
村上啓太郎

日頃長門守守事奉討仕はれん乞取に任所  
浪士  
石坂國造

日頃大國守守事奉討仕はれん乞取に任所  
浪士  
和田理之助  
松次良徳

日向松年出雲十宮本上松考

下通り松上

杉原松原  
中條令助  
宮本上松考

日向松年出雲

方中松

七井松

長田松

赤田松

清長松

少松

松永

金子松

清井松

林原松

陸田松

上林松

萩原松

伊波松

小倉松

和田松

田中松

大原松

中込松

羽賀松

小倉宗佑  
稲熊力三郎  
寺田右左衛門

右於詳定兩法狀由是并上信濃寺由月并  
松浦正一麻立合佐市寺佐信濃寺中後

二月十日



